「月刊社会教育」1996年12月号

地域における新しい「人間関係」の構築と公民館

――社会教育研究全国集会、公民館分科会での論議から見えてくるもの――

荒井容子

はじめに

社会教育研究全国集会の公民館分科会ではここ三年「地域と公民館」というタイトルで、公民館の事業・運営と地域の人々の生活との関係を問うことを課題としてきたが、今年の分科会準備のために二月に開かれた第一回合同世話人会では、今年が公民館五〇周年ということを意識して、現地世話人から「公民館はこの五〇年で地域社会に民主的人間関係をどれだけ築いてきたか、そのことを確認していきたい」という問題提起がなされた。

このとき私には、この中の「人間関係」という指摘が、ここ二～三年公民館をめぐって気になっていたことと絡まって、改めて新鮮に感じられた。

一　公民館の開放性と地域の「人間関係」の断面

私がここ二～三年気になっていたことというのは、たまたま私が関わっている公民館や地域施設で直面していたり、同じ公民館分科会の世話人の方から伺って、意識してきたこと

だ。従って、地域によってはもっと以前からあったことであり、また問題として痛感されてもいたのかもしれない。

その一つはロビーの利用をめぐる問題である。

公民館のロビーは、たとえば一九七四年にまとめられた「新しい公民館像をめざして」（いわゆる「三多摩テーゼ」）では、公民館の役割として提示した四つのうちの一つ「公民館は自由なたまり場です」に対応するように、「広く住民に開放し、自由な雰囲気で交流できるところ」として「最も気をくばらなければ」ならないと強く提案され、「いつでも、だれでも、どこでも」自由に人々が利用できることを大事にする公民館は、ロビーをかなり広くとり、ゆったりと談笑できる椅子や机も配置してきた。

ところが最近、この「自由なたまり場」としての公民館ロビー！が、利用マナーの悪い青少年たちの集団に利用され、困っているという話をよく耳にするようになった。机の上に足を投げ出して座り、大声でしゃべり、ごみを散らかす。注意してもきかない。次の日の掃除が大変だ等々（今年五月に昭島市の公民館が、恐らくは「苦渋」の選択としてロビー閉鎖に至るほど、この問題が深刻になるとは、まだ私は予想していなかったが）。

そこで気になっていろいろな人とロビーのことを話題にする中で、改めてロビーを利用している人々の最近の傾向にはまだまだ興味深い動きがあることがわかってきた。利用マナーの悪い青少年の利用はほかの公民館でも問題になっているようだが、それだけでなくロビーの机で受験勉強をしにきている青少年もけっこういて、こちらは静かに利用してはいるが、逆にロビーでおしゃべりしている人たちの話し声を横目で迷惑そうにみているようだという。また、浮浪者がロビーを利用しはじめ、さらに煮炊きまではじめたため、さすがに煮炊きはやめてほしいと断ったという話も聞いた。

また、比較的高齢に見られる人がロビーで一日中、新聞など読みながら一人で他の人と話す様子もなく過ごしているという話は、ずいぶん前から実践報告などでもふれられている。私はある市の社会教育意識調査に関わったことがあるが、その時の統計では、公民館のロビーをよく利用するのは青年と高齢者に多く、特に高齢者では男性にその利用が多いことがわかった。住民の方々は、女性の高齢者は福祉会館の方をよく利用し、また公民館を利用する場合はサークルとして部屋をよく利用するのではないかとコメントした。別のところでは高齢者専用施設での利用者間の権力関係も遠因として話題になった。

もう一つ、私の頭に浮かんだのは、公民館保育の利用者の意識の変化のことだった。

母親が子どもを預けて学ぶこと自体への理解を得ることがやっとだった時代には周囲の理解を得るためにも、公民館保育のあり方が深く話し合われ、制度を自分たちで作り上げて

いく意欲も高かった。しかし公民館保育の制度が整ってきた段階で、今度は、公民館保育は便利に利用できればいいのであって、運営に関わるというめんどうなことを求められるくらいなら利用しない方がいいという意見が母親たちから聞かれるようになった。そのような人たちに公民館の意味、公民館保育の意義を伝えても理解してもらえず、困惑した。数年前、そういう話を公民館の職員から聞いたことがある。

この問題は今年の分科会でお願いした報告者のお話の中でも指摘されていた。

草加市の住民で現在、公民館保育の保育者のグループ「じゃんけんぽん」の代表をされている平野淳子さんは、さきほどみたような公民館保育に子どもを預ける母親の意識の変化にふれていた。平野さん自身、すでに公民館保育の制度が作り上げられてから、子どもを預けて学んだ世代だったが、平野さんの頃には、公民館保育をつくってきた世代や保育者を引き受けてくれていた世代から突きつけられてくる問題に、なぜだろうと疑問をもち、みんなで議論することができた。しかし、今は議論ができない。疑問が返ってこないという。そしてほかの施設に預けて、カルチャーセンターを受講するよりも安くすむからありがたいということが、躊躇なく話されるという。こうした母親の意識は公民館保育のあり方を強く意識している保育者に疑問を抱かせる。しかし、他方保育者の方にも、公民館保育の意味を知らず保育を引き受ける人も出てきているという。

住民意識の変化の問題は住民参加制度との関わりでも報告者から指摘されていた。

狭山市の住民、大橋孝子さんは、住民が企画する公民館講座の一〇年のあゆみをたどる中で、講座企画過程での住民同士のやり取りの様子が変化してきたことを指摘していた。講座をはじめた当初は、その年の講座のテーマを絞り込むために、企画準備会に参加した人たちが何度も学習と話し合いを重ね、プログラム・講師依頼も手探りで努力していった。また当初は市民企画の講座を求めたサークルのメンバーが企画に多く参加し、その後九〇年代に入る頃から、企画に積極的に参加する人、とりわけ男性が増えてきた。そして企画過程でお互いに学びあい、育ちあっていくことがむずかしくなってきたという。意見が対立した場合、話し合ってまとめていくというよりも、異なる意見を併記することで終わっていることに、疑問を感じると大橋さんは語っていた。

これらのことは公民館が広く多くの住民に開放されるようになって、また住民の方でも多くの人がその生活の変化などを通して公民館を積極的に利用するようになって、改めて、すべての地域住民のための施設という公民館の「理念」に対し突きつけられてきた、地域における「人間関係」のリアルな問題としてとらえられるのではないだろうか。そしてそこに地域の「人間関係」の「断面」が姿を現しているのではないか。

二　公民館からまだ見えにくい地域の「人間関係」への挑戦

一方、公民館分科会では三人の報告者のうちのもう一人、福生市の公民館職員、加藤有孝さんは、公民館の中では見えにくいが現にある、地域の人々の抱えている厳しい生活の現実、そしてその現実と関わった自身の公民館での実践について報告した。

その中で加藤さんは職員が地域社会の実態をつかむ努力をする必要を強調した。

加藤さん自身は、統計資料の収集・分析、公民館だよりの職員自身による各戸配布、窓口やロビーでの住民との関わり合い、近隣の人々とのやりとり、ケースワーカーほかの他部局の行政職員との会合などを通して、地域の実態をつかむ努力をしている。その中で、高齢者の独居世帯の多さ、死亡原因の中にしめる自殺の順位の高さ、家庭教育学級の中で学級生とともに調べることによってわかってきた、家庭内での孤食状況――家族関係の希薄化などを地域の人々の生活の厳しい現実として指摘した。

また加藤さんはこうした地域の実態を知る努力の中で、障害児を抱えた母親、識字教育を必要としている人と出会い、その人たちの話し相手になったり、識字教室を行なったり、また婦人学級、家庭教育学級の参加者とともに地域の実態を調査するなど、公民館がそうした地域の人々が抱えている厳しい現実に積極的に関わる努力をしていることも報告した。

加藤さんの実践・報告は、まだまだ公民館の開放性に限界があること、すべての人への開放という理念を現実のものとする努力の必要性を提起しているとも受けとめられるように思う。

三　どのような「人間関係」の構築をめざすのか

さて、先に地域の「人間関係」の現実が公民館につきつけられ、そこに地域の「人間関係」の「断面」が姿を現しているのではないかと仮説してきたが、それでは一体、公民館はこれまでどんな人間関係を、今改めて、こだわって大事にしていきたい「どんな」人間関係を築いてきたのだろうか。公民館での実践・体験を通して、私たちはそれをどんなふうにとらえることができるのだろうか。

大橋さんは、市民企画講座の企画準備会で、学習しながらテーマを絞りこんでいく過程、そして講師依頼その他を通じてプログラムをみんなで作り上げていく過程、そこでの「育ち合う」過程を大事に思っている。それゆえに、さきにみたような現状への批判意識が生まれている。

平野さんは最近お子さんの通う小学校で、親たちと先生た

ちとで教育について語り合う懇談会をはじめたが、そこではまだなかなか率直に意見を出し合えないという。そしてそこで改めて、公民館保育室でつながってきた仲間たちとは率直に意見をいいあえる関係であったことを自覚し、そういう人間関係を生み出すことを可能にした公民館の意義を痛感したと語っていた。平野さんは、今の公民館保育室でも、また学校をめぐる人間関係においても、そのような関係を生み出すべく、すでに挑戦されているようだった。

今年の社会教育研究全国集会の基調提案は、このような人間関係を「学びあう関係」と表現していた。またこれまでそれは「育ち合う関係」とも表現されてきた。

四　地域の「人間関係」総体への挑戦

ところで加藤さんはその報告の中で、公民館の職員が地域の実態を認識し、また地域の中で厳しい生活を抱えている人々の相談にのり、ときに話し相手となるなどしながら援助していく活動の必要を強調し、公民館職員は「ひとり一人の住民の生活と関わっての課題を丁寧にあつかっていく」「ソーシャル・ワーカー」的側面をもつ必要があると提起していた。しかしこの提起に対し、休憩時間のことだが、小川利夫氏が反論していた。そばで聞いていた私には、小川氏は、地域住民の圧倒的多数の中流層をどう把えるか、「ソーシャル・ワーカー」たれとはそれをぬきにした議論だと、論じているように思われた。会場からも加藤さんの実践に対して、感動したという多くの感想の一方で、公民館の役割とは何か、他の行政部局との関係はどうなるのかという疑問も投げかけられた。

地域社会の弱い立場の人たちひとり一人に直接に応える実践への挑戦は、公民館の理念をより現実のものとするためにますます挑戦され、広げられていかなければならないが、そのことが、地域社会における人間関係の構築にとってどういう意味をもつのか、私たちはその見通しももたなければならないということなのだろう。そして、その見通しはまた、ロビーで、保育室で、住民参加の企画過程で、「学び合う」人間関係に突きつけられている、地域の「人間関係」の現実、そこにまた現れている地域の「人間関係」の「断面」へのそれぞれの実践場面での挑戦にもつながらなければならないということなのだろう。

五　実践方法としての「限りなくグレー」

分科会の報告の中ではまた、大橋さんたちが市民企画の公民館講座を実現し、それを継続するために「慎重」に努力してきたことが話題になった。

かつて枚方市で六〇年代の住民運動の息吹きを体験し、一

九七〇年代には小平市の公民館の教育講座で調査し白書をまとめる学習を体験した大橋さんも新天地ではなかなかそういう学習を切り開けず、さまざまな模索の中でようやく学びあっていく仲間を増やし、また住民の要求を受けとめようと模索していた公民館職員と出会い、市民企画の講座が実現した。そして、この市民企画の講座には外からのさまざまな圧力があったというが、さまざまな配慮のなか憲法の学習、市民自治の学習等が実現されてきた。

ところで、当時の公民館職員の回想によると、そのような努力の過程で、圧力に疑問を感じていたその職員に、大橋さんたちは「白黒の決着をつけなくてもいいのよ。灰色でもいいから、実現していきましょう」と語ったという（分科会参加者の一人がこの話と関わらせて、三人の報告者の実践を「限りなくグレーに近い」実践と特徴づけて表現した）。

また平野さんはその報告の中で、公民館保育に預けられる子どもの数が減ったとき、保育室をPRするために「子育てティータイム」という事業を行ない、母親たちもとても喜び、母親同士のつながりもできたが、この取り組みについてあとで保育者から一時保育の問題を指摘されたことも紹介した。そして平野さん自身は、母親たちの目が自分の子どものことから自分たちをとりまく地域・社会状況に広がっていくことを願ってはいるが、しかし、そのことを要求する前に、母親たちの、「今の時期なにをさせればいいか」「習い事は必要か」という、まだ自分の子どもにしか目がいっていないが、しかし率直な疑問を受けとめることから出発することが必要なのではないかと思うと語った。自分も含め、人はどこでどんな出会いで変わっていくのかわからないから、たとえ一時でも何かに出会うチャンスがあることは大事なのかもしれない、つまり、「公民館保育とは何か。どうあるべきか」からはじまるのではなく、「保育のおかげで一時でも子どもから離れて学習する充実した時間を得ることができた。子どもも楽しく過ごせたようだ」、という母親たちの解放感・満足感を大事にしながらも、しかしそこにとどまってしまうのではない実践のあり方、その模索の必要を語っていた。これもある意味で、グレーな実践の提起ではないか。

白黒ではない。正義・道徳を強調するのではない。しかし、人と人との関係のあり方にこだわり、関係をつくっていくことに挑戦していく。そういう実践スタイルなのだ。

実は加藤さんの報告の中でも、その実践のグレーというか柔軟な部分が多く語られていた。加藤さんが長期の講座をたくさんやっていることに対し、参加者から予算はどうなっているのかという質問がでたが、加藤さんは、予算が不足していたら自分が講師になることもあり、講座の最初は参加者も少なく予算もついていないが、だんだん参加者が増えてきてはじめて予算がつく講座になると、語った。加藤さんはまた、近所のアパートの経営者が公民館に隣接した公園の落ち葉の

ことで公民館に文句をいってきて、加藤さんがいっしょに落ち葉掃きをすることになり、その人とのやりとりを通じて地域のいままで気づかなかった様子を知り、その人の公民館への認識も変わったというエピソードを語ったが、結局その人は自分の経営しているアパートの前がきれいになったら帰ってしまったという。しかし加藤さんはそれを批判するのではなく、そこに地域住民のさまざまな心持ちをとらえているようだった。

おわりに

公民館は誕生からまだわずか五〇年しか経っていない。しかし、その中でもそれぞれの時代に、私たちは自分の生活している身近なところで人と出会い、仲間をつくりながら、夢をかたり、夢を実現していくことを可能にする場として公民館に期待をかけてきたのではないだろうか。戦後初期、町に文化を興すという思いは公民館へとかけめぐった。一九七〇年代の公民館づくり運動は、学びたいという一人ひとりの思いを、そこにとどまらせずに、新しい「地域」をつくろうという思いへと公民館を導いた。

公民館で学ぶ多くの人たちが築き上げてきた「学びあう」「育ちあう」、そしてつけ加えさせていただけるなら「夢を語り合え、何かを生みだしていける」、そういう「人間関係」を、公民館の面前あるいはその彼方でその「断面」を現している地域の「人間関係」に食い込んで、どれだけリアリティをもって築いていけるのか。そしてその努力は「人間関係」をめぐるどんな新たな価値を私たちに教えてくれるのか。公民館分科会でも、今後もそういった視点から実践を交流し学びあっていきたい。

（あらい・ようこ＝法政大学）